氏　　名	飯島　照仁
学　　位	博士（芸術学）
学位記番号	博（芸）甲第3号
学位授与年月日	平成16年3月20日
学位授与の要件	学位規程第3条第3項該当
学位論文名	茶の湯空間における勝手および水屋の研究
審査委員	主査　教授　倉澤　行洋
	副査　教授　池田　有隣
	副査　教授　西村　　武

論 文 目 録

1．はじめに（論文の趣旨）

2．論文作成に至る研究史

3．茶の湯空間の概論

3-1 露地　茶室へと誘う理を尽くした意匠空間

3-2 茶室　用途、目的、自然条件、すべてを考慮した空間

3-3 趣向　すべては一会かぎりの茶の湯のために

3-4 わび　客に対して最善を尽くす総合的空間

＜水屋成立以前＞

4．隠栖の空間と十五世紀の初期茶座敷における勝手の空間

4-1 慶滋保胤の『池亭記』から学んだ『方丈記』の数寄空間と勝手

4-2「室町殿行幸御飾記」会所の茶の湯空間と勝手

4-3「東求堂の同仁斎」の墨書「御いろりの間」

4-4「掃墨物語絵巻」の茶座敷と勝手

＜水屋成立過程期＞

5．十六世紀の初期茶座敷における勝手の空間

5-1『小河御所并東山殿御餝記』及び『君台観左右帳記』の茶湯棚と茶の湯空間

5-2 公家三条西実隆邸「茶湯所」の文化交流と建築普請

5-3 公家鷲尾隆康の日記に見られる数寄

5-4『宗長手記』における数寄の空間

5-5 茶書における「勝手」用語の初出と勝手の形態

5-6 紹鴎の茶湯座敷と「くと(竈土)茶の湯」の勝手について

5-7 初期四畳半の間中板の茶の湯空間と勝手

5-8『烏鼠集』における初期茶座敷と袋棚及び勝手

5-9『習見聴諺集』の「古傳書」における「たんすたて様」と「くつろぎの間」

5-10 紹鴎の四畳半にみられる勝手

5-11 神社･仏閣における「水棚」と「茶湯水棚」の存在について

5-12 水屋洞庫の茶の湯

＜水屋成立期＞

6．十七世紀の茶室における勝手・水屋の空間

6-1 桃山期の外国人から見た数寄屋の勝手

6-2-1 茶書における「鎖の間」用語の初出と鎖の間の形態
6-2-2 鎖の間と勝手水屋について
6-3 伝少庵筆「利休居士聚楽之図取」における井戸と「水屋」
6-4 茶座敷における勝手の仕掛棚と勝手拝見
6-5 客座と勝手を共有した相伴席の茶の湯空間
6-6 茶書における「水屋」用語の初出と水屋の形態
6-6-1 水屋の意義について
6-6-2 茶書における「水屋」用語の初出
6-6-3「水屋」と「水谷」の用語の意義
6-6-4 水屋の絵画資料について
6-6-5 二つの水ヤ神社、「水谷神社」と「水屋神社」
6-6-6 水屋と閼伽棚について
6-6-7 重要文化財日光山輪王寺、
鳳来寺山重要文化財東照宮の「水屋」
6-7『松屋日記』における茶の湯空間と「水ヤ」
6-8 茶座敷、囲いの「水遣」について
6-9『和泉草』における茶座敷の勝手と勝手拝見
6-10 京都島原揚屋における数奇屋と囲いの水屋
6-11「小座敷寸法抄」における「水屋」
6-12 高台寺の茶湯棚について
6-13『南方録』における「水屋」

＜水屋充実期＞

7．十八世紀の茶室における勝手・水屋の空間

7-1「筧の清水」を使った茶の湯
7-2 久田宗全の作風を伝える指図帳と「水遣」
7-3 有楽流の茶の湯と「水屋」について
7-4『槐記』における茶席と勝手について
7-5『茶湯秘抄』における勝手と「水屋」
7-6「旧一条恵観山荘(西賀茂山荘)」の「水屋」について
7-7「天明以前の千家古図」における「水屋」
7-8 裏千家八代又玄斎一燈宗室と「水屋」
7-9 川上不白の茶の湯における勝手と「水遣」
7-10 置水屋の形態と好みの置水屋について
7-11 酒井宗雅の茶席と「水屋」について
7-12 速水宗達の茶の湯における勝手と「水屋」
7-13『茶道早合點』における勝手と「水遣」

＜水屋充実期＞
８．十九世紀前期・中期の茶室における勝手・水屋の空間
8-1 中井家文書における勝手と「水屋」
8-2 草間直方が伝えた勝手と水屋の図
8-3 武者小路千家五代一啜休翁口授と「水屋」について
8-4『茶道筌蹄』における勝手と「水屋」
8-5 井伊直弼の茶の湯における勝手と「水屋」
8-6『喫茶送迎記』における勝手と「水屋」
8-7 裏千家十一代玄々斎精中宗室の伝えた勝手と「水屋」
＜水屋発展期＞
９．十九世紀後期以降の茶室における勝手・水屋の空間
9-1 立礼の茶の湯空間
9-2 立礼の水屋と立水屋について

１０．現存する名席の水屋と歴史

１１．これからの茶室における勝手・水屋の空間
11-1 流派にみられる水屋の理念
11-2 これからの水屋の実際と実例

１２．結語

参考文献

付属資料

論文内容の要旨

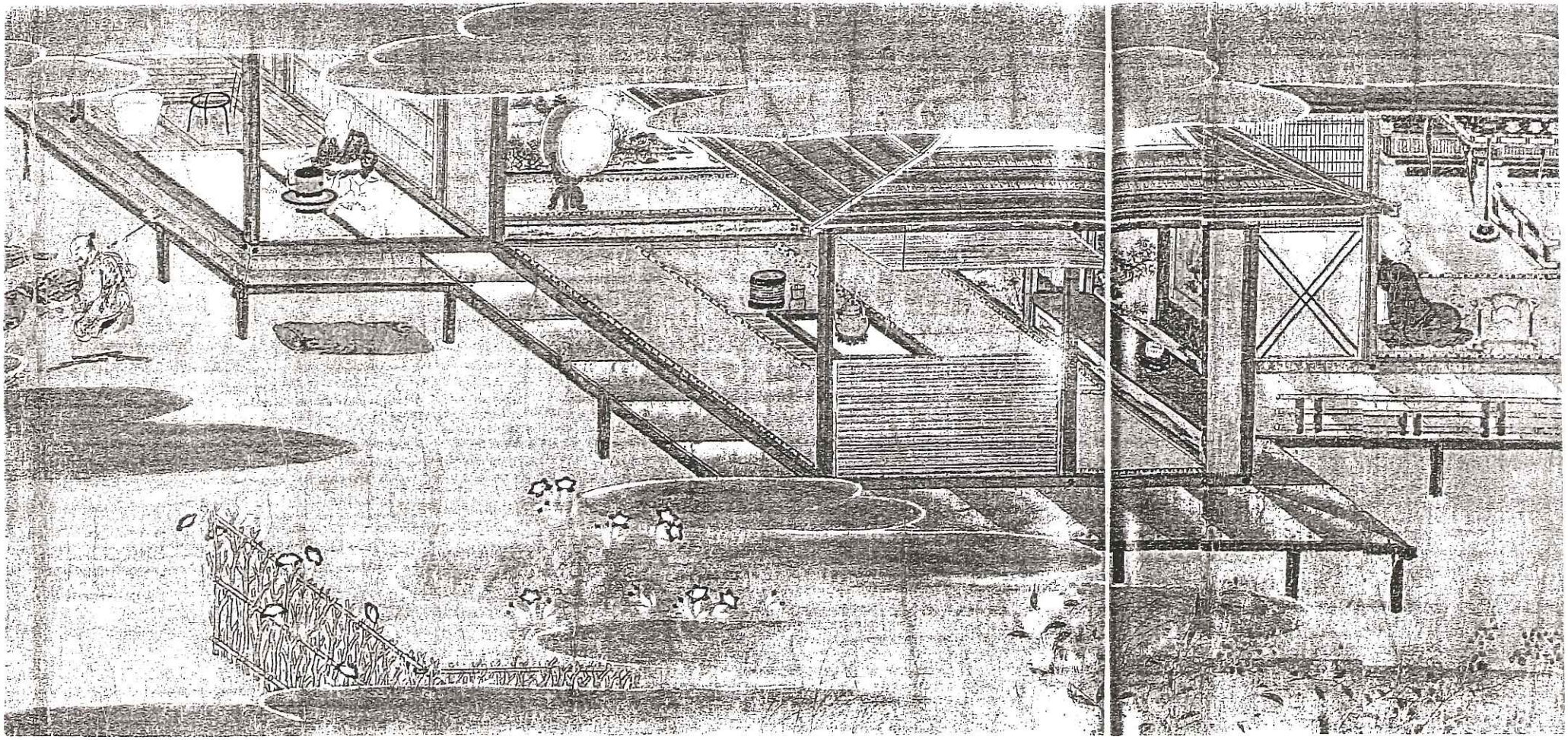
茶の湯空間は、一般に待合・外露地・腰掛・中門・内露地・蹲踞・茶室・水屋・勝手・主客などが統合され、それぞれが茶の湯の進行に欠かせない働きをなしている。茶の湯空間の一つである水屋は、現在、茶室に隣接して設けられ、主に茶道具を清め整え、点前や炭・花・茶・懐石・菓子の準備をする茶の湯空間を意味する。

しかし「水屋」(「水谷」) という言葉とその意味するところが、いつ頃から流布したのか、現在まで明確にはされてはいない。また古来幅広い意味合いで使われ続けている「勝手」という用語との関連についてもあまり明らかにはされていない。

「水屋」は、茶の湯が行われる限り茶室に隣接し必要不可欠な存在である。だが残念なことに茶の湯空間における茶室についての研究・論文は多いが、水屋および勝手とその周辺の研究は極めて少なく資料も限られている。

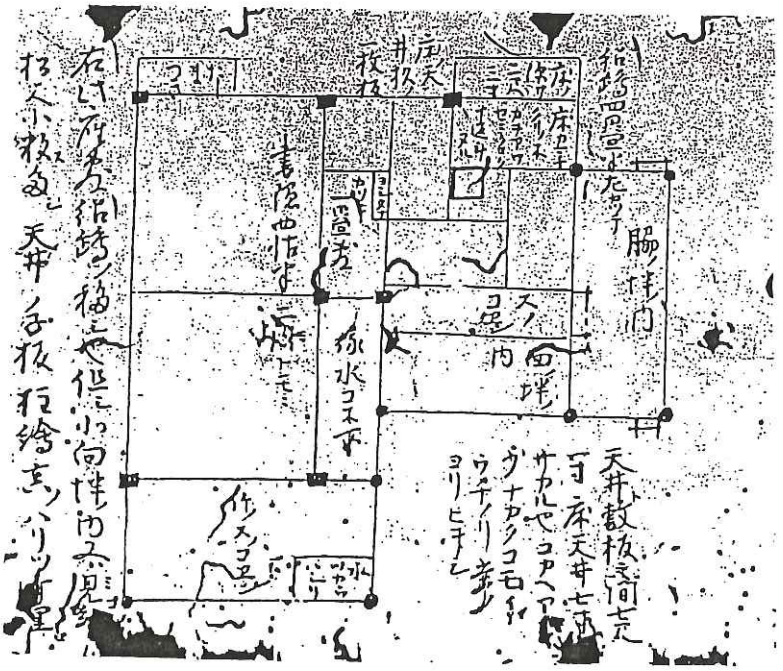
そこで本論文では茶の湯空間研究の盲点ともいえ、未だほとんど手が付けられていない「水屋」の解明を、少しでもすすめるべく考察を試みたい。ここでは「水屋」および、それと関係の深い「勝手」さらにその周辺にも目くばりをし、十五世紀から現在までの「水屋」の通史的な見地に基づき、主に書写年代の特定可能な信憑性の高い、活字化された茶の湯資料を中心に、「水屋」に関連する記載事項を抽出することから始める。次に「水屋」と「勝手」の、時代ごとに特徴を示す使用例やその背景及び理念、またそれらの周辺事項についての記載を時代ごとに整理することが不可欠であるので、これらを総合的かつ歴史的に検討して行くこととする。茶室に隣接されて必ず存在してきた水屋及び勝手の研究は、水屋からみた茶室、水屋からみた茶の湯、水屋からみた日本の伝統文化を考察することに繋がるものと言え、これを検討し解明することは意義深いと考える。

また日本の伝統文化である茶道を現在まで四百年余り継承し護る茶家の水屋と、その周辺についても言及し、水屋の形態に現れている茶の湯の理念についても考察し、将来への展望をもあわせて考察してみたい。



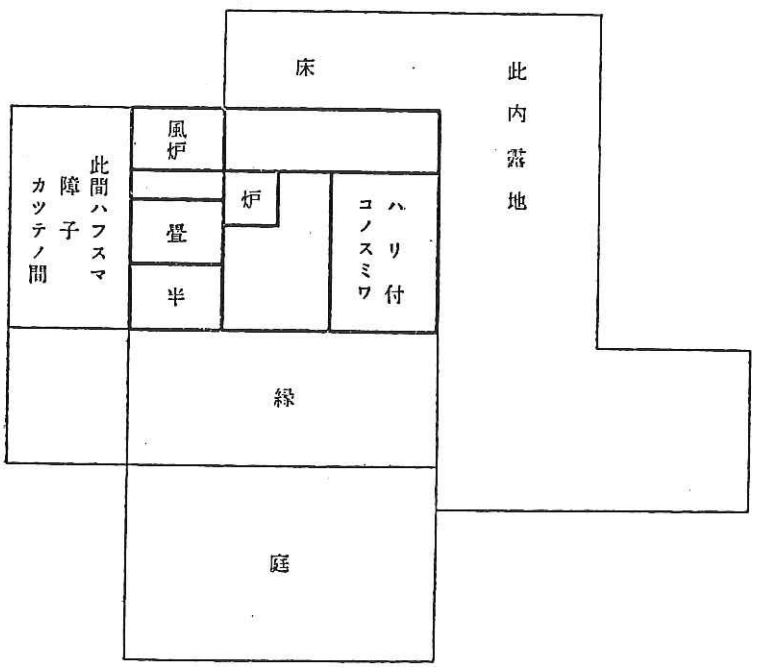
「掃墨物語絵巻」２巻の内下巻（室町時代１５世紀重文・徳川美術館蔵）

図11



『山上宗二記』（天正 16 年 1588）
紹鷗の四畳半の図

図12



『紹鷗遺文』

図25

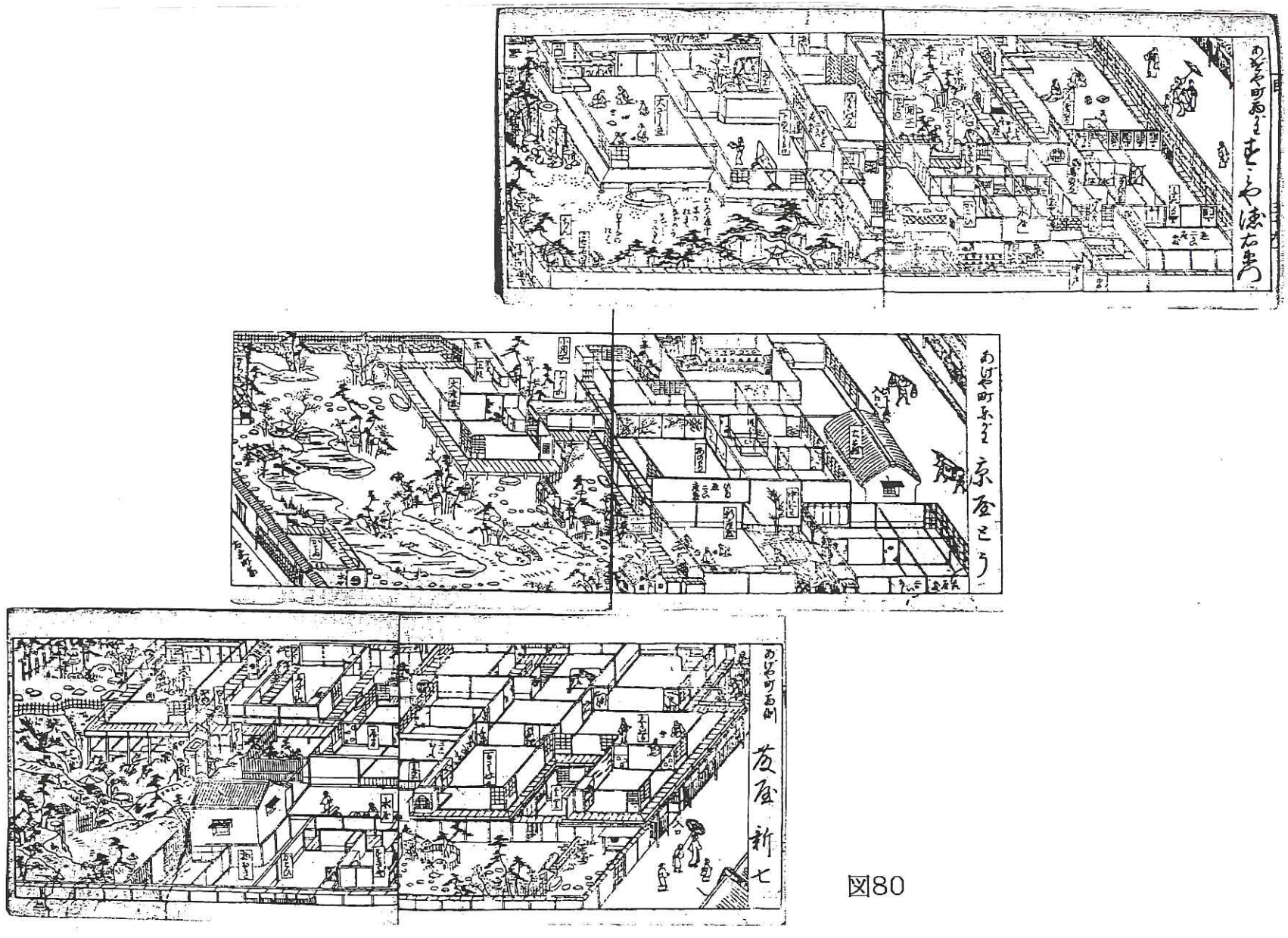


図80

『一目千軒』揚屋の各座敷鳥瞰図（角屋、京屋、藤屋）

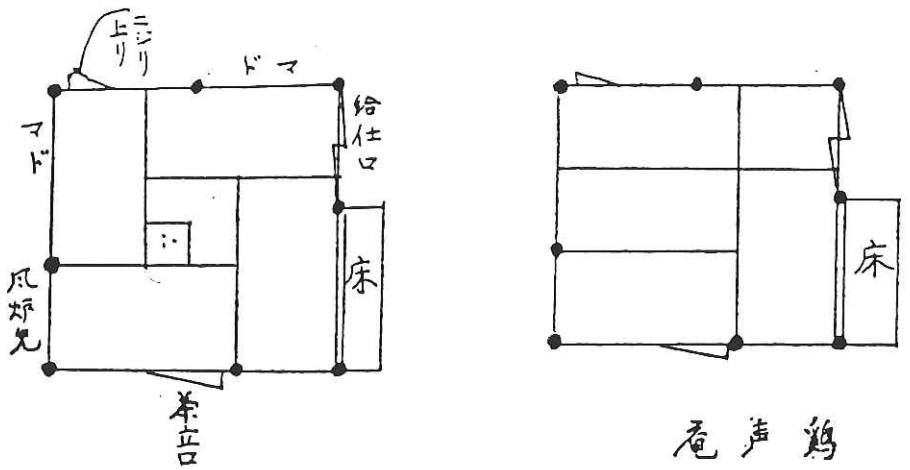

ニジリ
上り
ドマ
給仕口
マド
床
風炉先
茶室
鶏声庵
床

図112

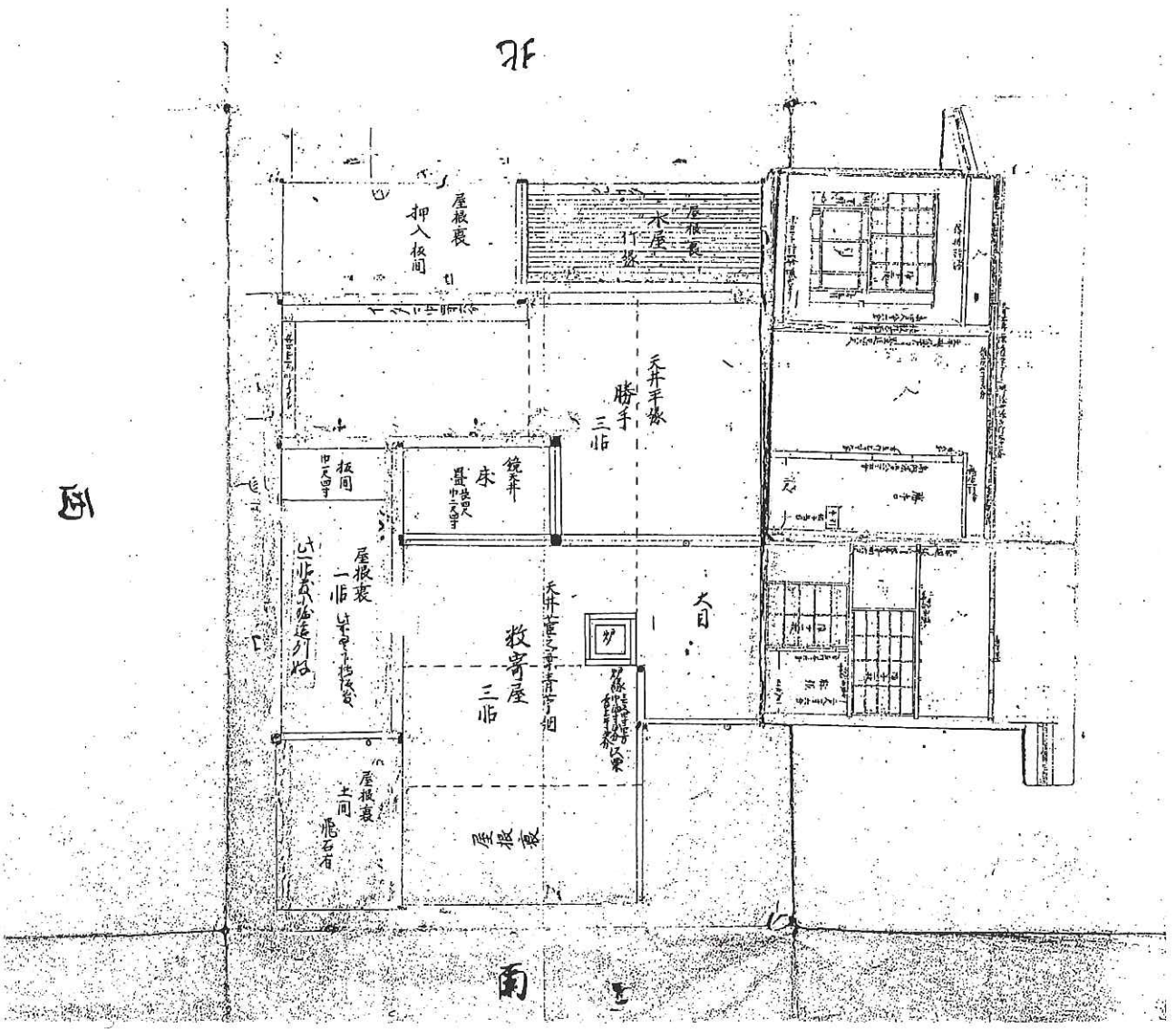

北
屋根裏
押入板間
水屋
竹格
屋根裏
天井半畳
勝手
三帖
板間
鏡天井
床
畳敷
屋根裏
一帖
大目
牧寄屋
三帖
屋根裏
土間
飛石有
屋根裏
西
東

図113

論文審査結果の要旨

1．本論文の要旨

本論文は茶の湯空間を勝手・水屋を中心に考察したものである。茶の湯空間は一般に、待合・外露地・腰掛・中門・内露地・蹲踞・茶室・水屋・勝手・主客などが統合され、それぞれが茶の湯の進行に欠かせない働きをなしている。その中にあって「水屋」は、一般に茶室に隣接して設けられ、主に茶道具を清め整え、点前や炭・花・茶・懐石・菓子の準備をする空間で、その存在は茶の湯の確立とともにあったと考えられる。しかし「水屋」（水谷）という言葉とその意味するところが、いつ頃から流布したのか、現在に至るまで明確にはされてはいない。また古来幅広い意味合いで使われ続けている「勝手」という用語との関連も曖昧なまま残されている。現在茶の湯空間における茶室についての研究・論文は多く出されているが、「勝手」および「水屋」とその周辺の研究は極めて少ない。本論文は、このように茶の湯空間研究の盲点ともいえ、未だほとんど手が付けられていない「勝手」・「水屋」の解明を試みたものである。

さて、本論文は、十五世紀から現在までの「水屋」の通史的な見地に基づき、信憑性が高く、書写年代の特定可能な活字化された茶の湯資料を中心に、「勝手」および「水屋」に関連する記載事項を抽出することから始め、次に「勝手」と「水屋」の、時代ごとに特徴を示す使用例やその背景及び理念、またそれらの周辺事項についての記載を時代ごとに整理し、結論として「勝手」と「水屋」の歴史的変遷を、水屋成立以前・水屋成立過程期・水屋成立期・水屋充実期・水屋発展期に区分する。

2．本論文の特色

次に、本論文の評価されるべき特色と考えられるものを列記してみる。

1. 本論文は、いわば表舞台の茶室に対する裏方である「勝手」と「水屋」の研究である。表舞台の茶室の研究は、資料も比較的多く研究している人も多いが、裏方である水屋・勝手の研究は、資料の探索も不十分で、その研究はなおざりにされてきた。本論文はこの盲点の解明に初めて本格的に取り組んだもので、将来の数奇屋研究に、広くは日本建築史の研究に貴重な一石を投じたものといえる。

2. 茶の湯の行なわれる形態が歴史の中でさまざまに変化していくのに伴って、その「準備のための空間」もさまざまに変化していった。本論文は、この「準備のための空間」を中心にした茶の湯空間の研究である。本論文において、この「準備のための空間」が成立し発展していく歴史を、数多くの資

料を駆使して探り、「水屋成立以前」「水屋成立過程期」「水屋成立期」「水屋充実期」「水屋発展期」として整理し跡づけたことは前人未踏の成果である。

3. 茶室建築は簡易建築であるため、実物資料には限界がある。そこで研究の方法として、信憑性の高い資料を時代に即し、綿密に考察して行くことが重要になる。本論文は、茶の湯に関連のあった社寺に伝わる日記、『兼見卿記』、『舜旧記』、『多聞院日記』、『隔冥記』などをはじめ、『茶会記』や伝世された茶書、茶家や大工・数寄者に伝わる文書などを広く探索し、これを細かく分析検討している。その上に、『東海道名所記』や『一目千軒』など従来取り上げられることのなかった資料に光を当てた。

4. 本論文の最後に、飯島氏自身の作図による茶室の設計図が付載されている。それは式上の四畳半茶室に八畳敷の広さの水屋を備えたものであるが、その水屋は、客の人数や茶の湯の一会の性格によってさまざまな使い方ができるように工夫され、本論文の研究の成果が実地に生かされている。これによって証されるように、本論文の研究が、ただの空理空論でなく実地を踏まえたものであることは、論述の確かさ・信憑性を高めている。

３．審査の結果

以上のごとく、本論文には評価されるべきいくつもの特色をもっているが、なお今後の課題とすべき問題点もある。その第一は、用いられている膨大な資料に、なお消化不足の憾みのあるものがままあることである。第二は、水屋の成立期、充実期、発展期などの区分において、何をもって「成立」「充実」「発展」とみなすかが、十分説かれ得ていないことである。

これらの課題を残すものの、本論文は上述のごとく、その瑕瑾を補って余りある意義と価値を有し、博士の学位を授与するにふさわしいものと、審査員三名一致して判定した。